

---

# 舐め終わってから

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

舐め終わつてから

### 【ZPDF】

Z6981S

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

裕美子は食後のデザートに飴を舐めた。だが母がそこで彼女に。candy store企画作品です。今のはゆるやか「メモリー」です。

舐め終わってから

池上裕美子は晩御飯を食べ終わりだ。

食後のデザートにあるものを取り出した。それは何かといふとだ。キャンディだ。それを取り出し袋から出して口の中に入れたのである。

口の中に入れると舐めはじめる。その甘さが口の中全体を支配する。味はミルク味だ。その優しい甘さが裕美子にとつてはこのうえなく美味しいものだつた。食後のデザートと言つていいかわからない位ささやかなものであるがそれでもだ。その甘さは彼女にとつては最高のデザートであつたのだ。

しかしだ。舐めているとだ。その彼女にそれまで一緒に食べていた母親がこう言つてきたのである。

「食べ終わつたら後片付けしなさい」

「あつ、うん」

裕美子は母の言葉に頷いてすぐに席を立つてだ。そのうえで食器をなおしはじめた。食器洗い器の中に入れて一気に洗う。その方が水道代や洗剤を使わなくて済むので経済的だとだ。母も喜んでいる。食器を全て食器洗い器の中に入れてまたキャンディをゆつくりと味わえると思つた。しかしである。

母は今度はだ。裕美子に対してこんなことを言つてきたのである。

「ちょっと牛乳瓶外に出してきて」

「牛乳瓶つて？」

「だから牛乳瓶よ」

「こう彼女に言つのである。

「それ出してきて」

「つうん、私も飴舐めてるのこ」

「舐めながらでも動けるじやない

「」の場合は母の方が正論である。まさにその通りであった。

「だからよ。いいわね」

「仕方ないなあ。それじゃあ」

「」のつしてだ。裕美子は再び席を立ちそのまま牛乳瓶を家の牛乳瓶入れ、いつも牛乳屋さんにそこから牛乳を貰い牛乳瓶を手渡す場所に置いておいた。それが終わってからまた家に帰つたのである。これでやつと飴をゆつくり舐められると喜んでだ。ところがなのであつた。

母はまたしても言つてきた。今回は何かといつどだ。

「御風呂入りなさ」

「御風呂入つて」

「それか歯を磨きなさい」

「」のつ言つのである。どちらかにじぶんとこいつのだ。

「いいわね。すぐにね」

「まだ飴舐めてるのに」

それはまだ口の中に残つてゐる。思つたよりも減つていいない。彼女にとつて母の今の言葉はだ。迷惑以外の何者でもなかつた。

「それでそんなこと言つの？」

「舐めながら御風呂入られるでしょ」

「嫌よ、そんなの」

それはだ。顔を顰めさせて断る裕美子だつた。

「何か食べながら御風呂に入るなんて」

「あんたそういうのは嫌いなのね」

「正直言つて好きじゃないわ」

本音をだ。母親にありのまま話した。

「だから、それは」

「じゃあ歯磨きしなさい」

「余計に無理じゃない」

せつときよつわらに顔を顰めさせての反論だつた。

「飴舐めて歯磨きつて。じうやつしてするのよ」

「とにかくどちらにしなやこ」

あくまでこの皿つて引かない母だった。口の辺り實に強い。やは  
り母は強しである。

「いいわね」

「ちえり、じゃあどうこうひつてこのよ」

「どちらかにしなやこ」

飴を舐めながら反論する娘への反論だった。

「どうちかにね」

「どうちかにつけ」

「それでどうするのよ」

母の問にはこれまで以上に決断を迫るものだった。かなり強い口  
調になつてゐる。

「あんた。どうするのよ」

「ううん、そうね」

まだ飴を舐めている。それは終わりそうもない。裕美子は進退窮  
またた。

風田が歯磨きか、それが問題だった。どうあえず飴を舐め続ける  
ことは許されそうにもなかつた。それで遂に進退窮まつたのである。  
果たしてどちらにすべきか、まだ風田の方が飴を舐め続けられるの  
ではないか、ふとこう考へた。そしてそう考へるとであつた。

彼女はそちらに傾いた。そうしてだ。

母に対してだ。こう言つのであつた。

「わかったわ。じゃあね」

「どうにするの?」

「いいよ」

言おうとした。しかしであつた。

そこで飴がだ。舐め続けていてかなり小さくなつてしまつた、先  
程よりもさらに小さくなつてしまつたそれがだ。喉の中に落ちてし  
まつたのだった。

やうなつてしまつてだ。裕美子はだ。

拍子抜けした声でだ。母元ひつひつた。

「今ね」

「今? どいつしたの?」

「餡玉飲み込んだじやつた」

いつの言つたのである。確かに飲み込んだ形になる。

「どいつよひ」

「どいつじよひつて。飲んだのよね」

「うそ、飲んだじやつた」

「じゃあどいつするの?..」

母親はそれなばらだとだ。裕美子に對して問ひてきた。拍子抜け

した感じの娘の言葉とはだ。全く違つていた。

「ええと、とりあえずお風呂かな」

「お風呂にするのね」

「餡。なくなつたから」

それでだといふのだ。その懸念材料となつてしまつてゐる餡がな

くなつてしまえばだ。彼女にしてもだつた。

どひらかを選ぶしかない。そつしてであつた。

彼女はお風呂を選んだ。そのつえでお風呂場に向かいまづは服を脱ぐのだつた。

その服を脱ぎながら。考えることとこえば。

「お風呂からあがつたら。今度はメロンのにしようかな」

お風呂からあがつても餡を舐めようと考えていたのだ。それから歯を磨こうと思っていた。何につけてもだ。彼女はまず餡ありきりだつた。そんな女の子だったのである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6981s/>

---

舐め終わってから

2011年4月24日00時55分発行